

松代藩兵制士官学校関係資料（其の二）

田 中 貞 夫

前稿(1)において、松代藩兵制士官学校の主要教科書について触れたが、本稿では、同校の生徒名、および、教官であった武田斐三郎の書簡（松代滞在時）を中心に報告することにする。

1、生徒名簿

松代藩兵制士官学校の教官については、すでに述べられているが(2)、生徒名に関する詳細な記述はみられない。その上、「最初、藩当局は士官学校の興隆に力を注ぎ、入学資格者の名簿を作って、ほとんど強制的に就学せしめたから、六〜七〇〇人の就学者があった」(3)とする見解もあるが、これは後年設立された、西洋兵学寮士官学校の生徒数と混同したものであることは、明白である。

ところで、当時の松代藩、真田十万石ぐらいの中規模の藩では、洋式兵学の伝習生の実数もおのずと限度があろうと思われる。さらに、藩士の中からエリートのみを厳選した兵制士官学校と、年齢をあまり制限せず、松代藩士に洋式兵学の再訓練を施すという目的を有した兵学寮とは、同一に語ることは出来ない。

さて、このような問題を突き止めるべく、資料調査をしていた筆者は、偶然にも「松代藩兵制士官学校生徒名簿」ともいうべき文書を発見した。それは、長野市松代町在住の郷土史研究家、高橋雲峰氏の所蔵になるもので、巻紙に生徒名が墨書されており、七十余名の名前が読みとれるものである。

なお、巻頭に記された「申上九月」なる文字によって、この名簿が認められた年月を、1868年9月と推定することが出来、この時期にはまだ生徒の移動があったことが、この資料によって窺える。

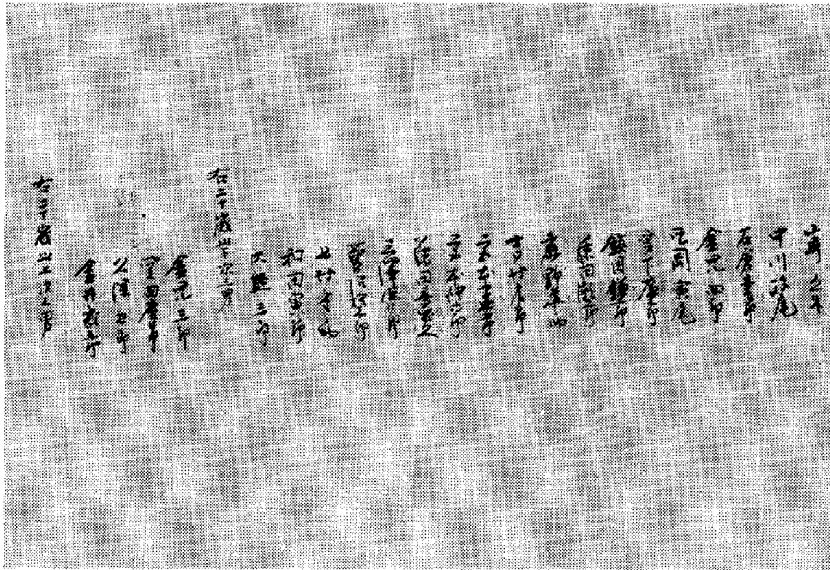
何故なら、兵制士官学校が設立されたのは、慶応4年（1868）6月のことであり、実際に授業がおこなわれたのは、明治2年（1869）1月11日のことであるからである(4)。

次に生徒名を列記すべきであるが、名簿の中には、「殿様付」となって授業を受けることなかった、長井小金吾、木村正男。それに、開講時間際になって生徒の世話役に転じた者、山田兵衛、拓植彦四郎、山越新八郎、近藤鉄次郎。さらに、嗽吹手取締に任命された、松村半次郎、松井惣吉の両名を、ここでは上記の理由から除くことにした。

兵学修業

願により

伊 東 磯 之 進
竹 内 直 太 郎
鎮 目 金 太 郎
坂 野 柔 次 郎
吉 村 誠 太 郎
宮 下 欽 次 郎
友 野 鴻 次 郎
河 原 慎 太 郎
樋 口 水 之 助



(松代藩兵制士官学校生徒名簿)

右者(5)兵学修業以
前趣申聞候

右者(7)洋書修行仕
候様ヒ仰渡ヒ置下度

右二十歳以下当主嫡
子

同 覚 男
鹿野 勇之助
奥村 峯之助
小松 秣三郎
矢野 倉甲子太郎
志村 謙之助
常田 壬太郎
大瀬 増之助
富岡 房尾
松村 甚之丞
関山 孝之進
水野 野之進
伊東 熊之進
松崎 崎廉
坂西 光雄

依田 謙次郎(6)

○中 川 濱 尾
○篠 崎 守 尾
岩 下 新 次 郎
○松 村 亀 太 郎
○森 猪 太 郎
原 秀 太 郎
内 林 輝 人
○菅 沼 道 太 郎
片 岡 啓 太 郎
佐 川 仲
成 澤 文 治
高 橋 誠 治
東 條 辰 三 郎
宮 本 壬 子 郎
田 中 甲 子 次 郎
片 山 岩 尾
清 水 新 太 郎
与 良 捨 三 郎

前 嵩 勇 記
横 田 德 川 郎
緑 川 静 雄

右二十歳以上嫡子

山崎久米
中川政尾
石倉章次郎
金児四郎
片岡寅尾
宮下廉三郎
鎮目鎌二郎
藤田瀧三郎
鹿野道之助
吉村房次郎
宮本孟五郎
宮本仲六郎
藤田音幾久
三澤源次郎
菅沼捨三郎
上村守之助
和田寅次郎
大熊三郎

右二十歳以下次三男

金子三郎
関田慶次郎
久保五郎
金井幾三郎

右二十歳以上二三男

2、武田斐三郎の書簡

松代藩滞在時の斐三郎の書簡は、従来の研究においても、ほとんど発表されていないといっても過言ではない。その理由としては色々と考えられるが、松代在住の期間が短期間であったことが、まず第一の原因に挙げられよう。さらに、当時の世相を反映してのことと思われるが、斐三郎にとっては、江戸在府の時は勿論のこと、松代藩の中においても、けして味方ばかりではなかった。このような事を考慮に入れるならば、用心の為に書簡のやりとりは極力、注意をしていたものと推察される。

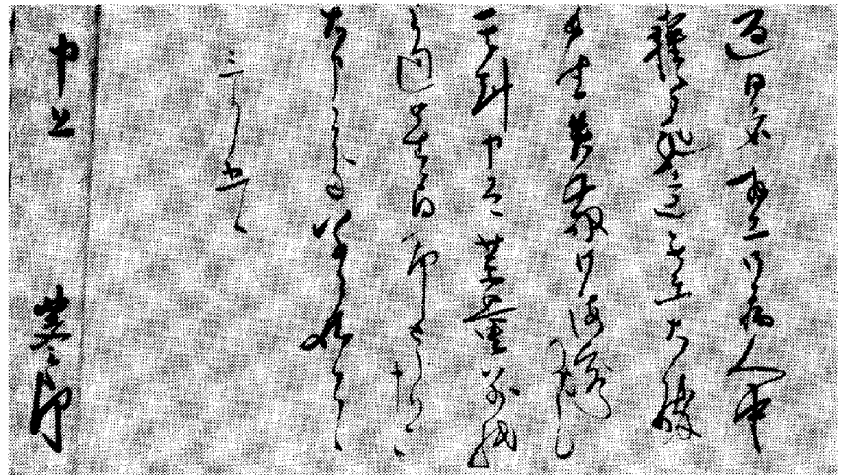
しかし、松代での生活は、たとえ藩中に心よく思われぬ者があったにせよ、人々の中には尊敬をしていた人もいたろうし、斐三郎を優遇した者もいたことは事実であろう。

なお、斐三郎は書簡の一通において、「竹多」と署名している。これは武田の変名として、「竹多」を使用したものであろう。

さて、斐三郎の文書の紹介であるが、この貴重な直筆は、長野市松代町在住の中村堅治郎氏が、長年所蔵していたものであり、本稿作成するにあたって、発表を快諾してくれたものである(8)。

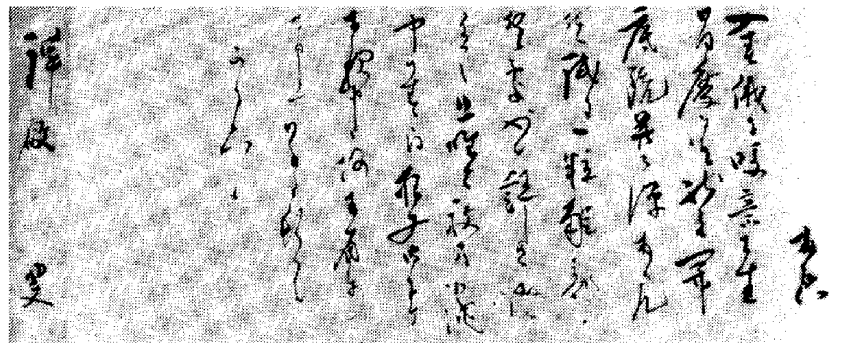
なお、斐三郎の直筆は縦書であるが、論稿の形式を横書きとしたので、書簡もそのような形で報告したことを、お断わりしておく。

「 過日者拜上御病人中
種々御馳走罷在大醉
長坐失敬御海容可ヒ下候
其刻申上候葉量別紙
之通御坐候旨即さし上申上候
右申上度早々頓首
三月五日
申上
斐三郎 」



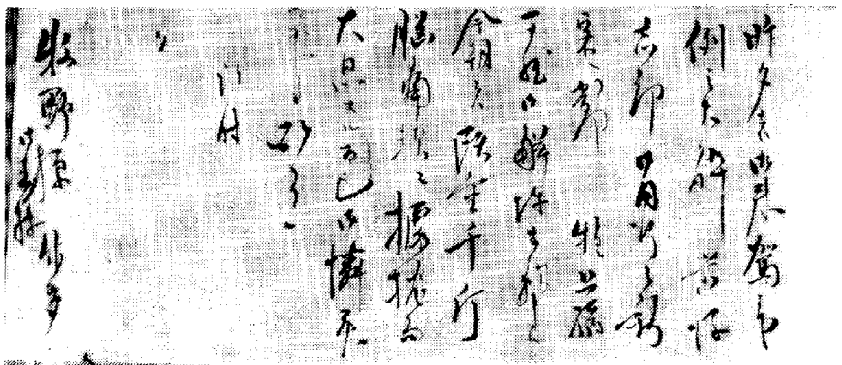
(武田斐三郎書簡)

「 拝啓
入春俄に暖意相成
御同慶奉存候然者開
底銃并に弾拝見
仕候試に一粒解部
仕候處少々託しき儀も
有之且唯今被為御詠
中に御坐候旨猶与御下ケ
相願申候依拝眉萬
可申上早々頓首
正月八日
謹啓 斐 」



(武田斐三郎書簡)

「 昨夕者御来駕ヒ下
例え大醉前後
忘却御同行之新
客へ對し特に恐縮
可然御解陳相願申候
今朝者頭重千斤
脳痛頻に據枕而
大息スル而已御憐笑
可ヒ下候頓首
式時
牧野様御直披 竹多」



(武田斐三郎書簡)

註

- (1) 「松代藩兵制士官学校関係資料（其の一）」、一般教育部論集第8号、創価大学、1984年。
- (2) 『松代学校沿革史』、松代小学校編。
- (3) 『愛媛の先覚者②』、愛媛県文化財保護協会。
- (4) 評判がよかったのであろうか、後には上田藩からの留学生もあった。
- (5) 原文は縦書なので、「右者・・・」となっているが、本稿では上記という意味になる。
- (6) この人物は、『松代学校沿革史』の中においては、兵学二等助教として、その名が見られる。
- (7) 註(5)に同じ。
- (8) 高橋雲峰氏の言によれば、この資料は、中村堅治郎氏の父親、梅司氏（表具師）が表具の裏張用として購入したものであったという。この買取った反古紙の中には、その他の資料も含まれていたが、昭和28年、松代文武学校百年祭の時、松代小学校へ関連資料として高橋氏が持参し、文武学校分の資料と兵制士官学校分とを撰り分け、前者を飯島忠夫博士にお願いをし、後者を大平喜間多氏に依頼して、『松代学校沿革史』の構成に役立てたと聞く。

（本稿を草するにあたり、高橋雲峰、中村堅治郎両氏にお世話になった。厚くお礼を申し上げる次第である。なお、古文書の解説には、高橋雲峰氏のご協力があったことを付記して、深く感謝したい。）